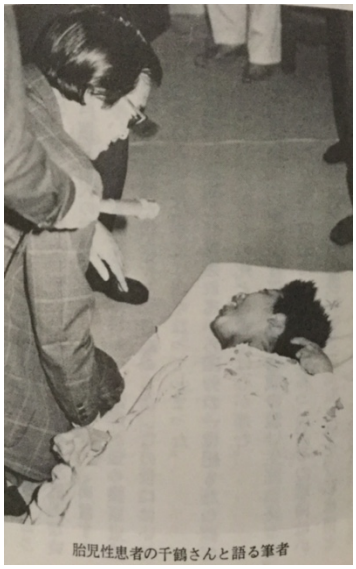
汚れなき宝子たち（2）

昭和 55 年 12 月 17 日、もう一人の胎児性患者の千鶴がこの世を去った。

私が水俣病がもっとも多発した茂道の千鶴の家をはじめて訪れたのは昭和 37 年頃だったと思う。両親は漁に行っているのか、誰も居ないうす暗い部屋の中に千鶴はねかされていた。ねたまま動くからであろう、ふとんからはみ出して床の上にころがるようにしていた。


胎児性患者の千鶴さんと語る筆者

体を触れるとびくっと体を硬直させ、目をとじた。診察のために胸を開くと足をばたばたとさせた。それから何度となく彼女の家に通い、昭和 37 年に正式に胎児性水俣病ということになってからは市立病院、また明水園へと、私は追いかけて訪れた。しかし、それは、千鶴への見舞というより、世界や日本各地から訪れる多くの学者たちを案内してであった。

ある時、いつものように外国の学者を案内して病棟を回って、帰ろうとしたとき、同じ胎児性患者の清子さんが私を呼びとめた。たどたどしい言葉で「チーちゃんが、先生の写真ば、くれて（写真を下さいって)」という。私は、本当に驚いた。千鶴にそんな複雑な表現力があろうなどと、考えてもみなかったからである。私には、「あー、あー」としか聞きとれないのに、同じ障害をもつ清子にはどうしてその意味がわかったのだろうか。そんなことがあるのだろうか。私は半信半疑で、一枚適当な写真をみつけてもっていった。「本当に、そういったのか」千鶴は全身で笑い、何度も顔をばたばたと縦にふった。これは肯定の「ハイ」の合図である。「どうするのか？」、千鶴の答は私には全くわからない。清子の通訳によると「ベットの横にはって」といっているのだそうだ。それから、数年の間は千鶴のベットの脇に五木ひろしと私の写真が並べられてはられていた。

彼女の世界はねたまま数平方メートルの空間でしかなかった。そして、ついに、その世界から出ることもなく、この世を去った。智子の両親が智子を東京まで連れて行き、チッソの幹部に会わせたがったその心情がわかる気がした。千鶴はそれもできず小さい空間の中で短い一生を終ってしまった。両親、兄弟、病院の職員以外交流が少なく、その空間以外の（外部の）世界から他の空気を運ぶ役目を私に求めたのであろうか、医者である私に体の痛みを訴えたかったのであろうか、あるいは愛みたいなものだったのだろうか、それは解らない。

（2016 年 5 月 10 日）